

中
2024

国

語

始める前に左の注意事項を読みなさい。

- 始まりの合図があるまで開いてはいけません。
- 問題は全部で21ページあります。
- 答えはすべて解答用紙に書きなさい。
- 始まりの合図で、解答用紙に受験番号、氏名を書きなさい。
- 質問があるときは静かに手をあげ先生の指示を待ちなさい。
- 終わりの合図で、ただちに筆記用具を置きなさい。

(第1回)

一

荒井尚人は、両親と兄が「ろう者（＝聴覚障がい者）」という家庭で育ち、今はフリーの手話通訳者となっている。元同僚のみゆきと結婚し、みゆきの連れ子（前の結婚相手との間に生まれた子）の美和と三人で暮らしていた。尚人は、自分の子どもが「ろう者」として生まれるかもしれないということを心配して子どもを作ることをためらっていたが、みゆきと話し合い、瞳美をもうけた。次の文章を読んで、後の問に答えなさい（なお、出題の都合で表記の一部を改めた）。

皆の手が顔の前でひらひらと動く。

この中で唯一手話を解さない園子でさえも、笑顔で両手をひらめかせていた。

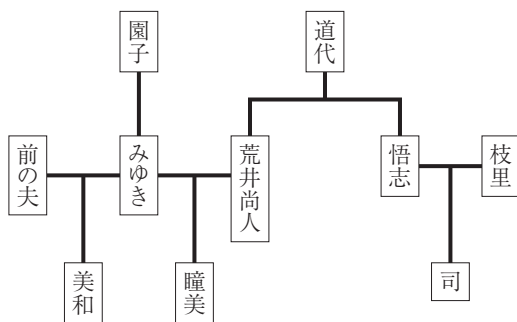
もちろん本日の主役たる瞳美は満面の笑みだ。たった四本とはいえ、ケーキに立てられたロウソクの火を自分一人で吹き消すことができたのは初めてのことであった。誇らしげな顔を家族の方に向けてから、^①皆の〈拍手〉に思いつきりの笑顔で応えている。

^②荒井尚人は、その光景をどこか不思議な気分で眺めていた。

奇跡、という言葉を使えば大げさと思われるだろう。しかし荒井は、自分がこんな風に団らんの日を迎えることができるのは、本当に想像もしていなかったのだ。

十二月の後半に生まれた瞳美の誕生日のお祝いには、両親である荒井とみゆき、十四歳になる姉の美和の家族だけでなく、荒井の兄・悟志一家——妻の枝里、長男の司——や、みゆきの母・園子たちも集えるよう、クリスマス近くの日曜日に開くことが最近は恒例になっていた。

二人の孫に無条件の愛情を注ぐ園子はともかく、数年前まではほとんど行き来がなかった悟志の一家までもが参加するようになったのは、瞳美が「聴こえない子」であることと無関係ではないだろう。



デフ・ファミリー——家族全員が生まれつき聴こえない「ろう者」——である悟志たちにとっては、「ろう児」として生まれた瞳美は、^{※1}まごうことなき自分たちの「ファミリー」なのだ。

同じくろう者だった荒井の母・道代^{みちよ}は瞳美の生まれる数年前に亡くなっていたが、^③生きていれば園子以上に孫のことを^{※2}溺愛^{でいきあい}したに違いない。

ロウソクを消すという儀式が終わった後は、皆からのプレゼント攻めだ。司から、園子から、美和から。差し出されたプレゼントを受け取っては、瞳美は歓喜の声をあげている。

美和が渡したのは、三人で相談して選んだ——といってもほとんどみゆきと美和の二人の意見で決まったのだが——絵本だった。

去年も一昨年も、ただ「何か貰える」ことで喜んでいた瞳美だったが、今年は包みを開いて、それが「本」であるのを確認した上で喜んでるのは成長のあかしだろう。

その光景を見ていた司が、笑顔で手と顔を動かす。

瞳美の周りにいる大人たちを一人一人指さした後、軽く握った手を顎^{あご}に当て、すぼめながら前方に出してから袋を担ぐ動きをする（＝サンタクロース）。最後に、拳の親指側を鼻の前に持ってきた（＝良い）。

にこやかな表情と合わせ、全体で、

〈瞳美ちゃんにはいっぱいサンタさんがいていいね〉

という手話表現になる。

しかしそう言われた瞳美は、Aとした表情を浮かべていた。

^④司は、一斉に向けられた皆からの視線——特に美和は鬼のような顔で睨^{にら}んでいた——に気づき、しまった！という顔になった。

すかさずみゆきが、

〈みんなからこんなにたくさんプレゼントもらって〉〈その後またサンタさんからプレゼントもらえる瞳美ちゃんのこと〉が〈へうらやましいって〉

そう^{※3}フオローした。

瞳美が合点^{がてん}したように、うんうん、と肯^{うなず}く。

⑤ 荒井は、浮びそうになった苦笑を慌てて噛^かみ殺した。みゆきに見られたら、笑い事じゃないとまた怒られるに違いない。

「サンタクロースを信じていた」という経験が、荒井にはなかった。まだ物心のついていない幼児期は分らないが、少なくとも最初の記憶にあるクリスマスプレゼントは、親がくれた「ブーツの形をした容器にアメがぎっしり詰まったもの」だった。

それを特に不思議に感じた覚えもないから、「サンタの正体」を知ってショックを受けたこともないのだろう。そのため、今でも幼い子供たちが「サンタクロースが存在する世界」で生きていることをなかなか理解できない。いや頭では分かっているけど、ついそれを忘れてしまう。

みゆきとまだ交際中の頃、五歳ほどだった美和と三人で、クリスマスの家族団らんを伝えるニュースがテレビから流れるのを観ている、「あの年でもサンタクロースがいるって信じているんだな」とつい口にしてしまったことがあった。

さっきの美和と同じく鬼のような形相^{ぎょうそう}でみゆきから睨^{にら}まれ、初めて失言に気づいた。幸いその時は、美和が荒井の言葉に気づかなかったのか、あるいはまた何か変なこと言っていると取り合わなかったのか、失言について問い詰められることもなくすんだのだが、以降は言動に気を付けるようにしていた。

努力の甲斐あって、美和も成長にするにつれ他の子供たちと同じように「サンタの存在する世界」から「存在しない世界」へと自然に移行できた。甥の司が今、あの時の自分と同じ失態を犯しかけたのがおかしかったのだ

が――。

ふと、司も同じだったのかもしれない、と思いが当たる。つまり、^⑥物心がついた頃から「サンタからのプレゼントをもらったことなどない」のではないか。

デフ・ファミリーという環境とは別に、愛想のかけられないあの悟志がサンタの真似事をしてるところなど想像できなかつた。^⑦屈託のない瞳美の様子に^{※4}安堵しながらまだバツの悪そうな顔をしている司が、少し気の毒になつた。

【中略】

そう思ってから荒井は、今この場にいるのが、「ろう者」と「聴者（聴こえる者）」、ちょうど半々であることに気づいた。前者は悟志一家に加え、瞳美。後者は瞳美を除く荒井の家族、そして園子。しかしながら会話のほとんどは、手話でなされていた。

CODA（コーダ）——Children of Deaf Adults。聴こえない親から生まれた聴こえる子——である荒井が達者であるのはもちろんのこと、幼い頃から荒井に手話を習っていた美和もすでに上級者であり、全くできなかつたみゆきも瞳美が生まれたことよって懸命に覚えていた。だからこの場で手話が「共通語」として使われるのは自然なことなのだ。

ひとり手話を解さぬ園子には、みゆきと美和が交互に皆の話を「音声日本語」にして伝え、園子の言うことは手話にして他の皆に伝えているから不自由はないはずだった。

とはいえ、園子の表情からもしかしさが拭えないのも無理はない。彼女が可愛い孫である瞳美と直接「会話」をしたのは、その場で教えてもらった、

結んだ両手を胸の辺りから上げながらぱつと開く（＝おめでとう）

両手を顔の近くでひらひらさせる（＝拍手）

ぐらいで、あとは、表情や身振りで感情を伝えるぐらいしかできないのだ。目の前で、司たちが楽しそうに瞳美と会話しているのが羨ましくて仕方がないに違いない。

荒井が感じたのと同じことを思ったのだろう、みゆきが

「お母さんもこっちに来て瞳美と話せばいいのに」

と声を掛けた。

「話すって言ったって、手話できないもの」

園子が、抗議するように言葉を返す。

「今までだって表情や身振りで『お話』をしてたじゃない」

「前会った時はそんな感じだったけど……」園子の顔が少し悲し気になる。「さっきちょっと話したら、

B とされちゃって」

『声』で話したんでしょ、それじゃ通じないわよ」

苦笑しながら言うみゆきに、^⑧園子が小さくため息をつく。

「あの子ももう少し言葉覚えてくれればねえ」

「お母さん——」

^⑨みゆきがたしなめるような声を出した。

失言と悟ったのか、園子も^⑩肩をすくめる。

手話は、言語——。中でもろう者が昔から使う「日本手話」は、「音声日本語」と同じように文法を持ち、複雑な感情や[※]ニュアンスまで伝えることができる「言葉」である。

みゆきから何度もそう言い聞かされていて頭では分かっているに違いないが、園子の本音としては、孫にも「自分と同じ言葉」をしゃべってほしいのだろう。

みゆきは、「ほんとお母さん、^⑪いつまでたつても理解してくれないんだから」とたびたび愚痴をこぼす。

「何で普通の幼稚園に行かさないのか、つてしょっちゅう言ってくるのよ、やんなっちゃう」

だが荒井には、そんな園子を責めることはできなかった。当のみゆきとて、瞳美が現在通う私立のろう学校――すべての授業を手話で行う国内唯一の学校・恵清学園けいせいの幼稚部に通わせることを決めるまでには、少なからぬ※6葛藤かつとうがあったのだ。

本当に手話だけでいいのか。

音声日本語を習得しないまま将来困ることはないのだろうか、と――。

^⑫「気まずい空気を察したのか、横から美和が軽い調子で言った。

「おばあちゃんも手話を覚えればいいのよ」

「この年になって、もう無理無理」

「そんなことないよ、お母さんだつてようやく、だもんねえ」

からかうような美和の言葉に、みゆきが「はいはい、まだまだあなたには敵かないませんよ」とへりくだったように答える。

「頑張つたらできる、つて言ってるの」

美和が再び園子に向き直り、優しく言った。

「おばあちゃんだつて覚えられるよ」

「そうそう」とみゆきも同調する。「とにかく、C 瞳美とお話ししてればいいのよ。遊びながら。そうしていけば自然に覚えていくから」

「そんなこと言つたつてねえ……」

園子はうらめしそうな顔で、司たちと手話おしゃべりで会話している瞳美のことを眺める。

「ちょっと一緒に来て」

美和が、園子の手を取り、瞳美たちの方に連れて行った。彼らの前で手と顔を動かす。

〈お姉ちゃんとおばあちゃんも仲間に入れて〉

〈いいよー〉瞳美は満面の笑みで迎えた。

〈プレゼントした本で、みんなで遊ばない？〉

〈ほんで？ どうやって？〉

家族からプレゼントした絵本は、「手話で遊ぼう」という題名で、手話を知っている子供はもちろん、知らない子供も、大人でも楽しめる内容になっていた。

〈みんなで当てっこしよう！〉

美和の言葉に、〈しよう、しよう〉と瞳美も嬉しそうに応える。

⑬ 園子も戸惑いながらではあるが、瞳美と遊べるのが嬉しいのだろう、身を乗り出していた。

(丸山正樹『わたしのいないテーブルで』より)

- ※1 まごうことなき〓まちがえようがない・確かな
- ※2 溺愛〓むやみにかわいがること
- ※3 フォローした〓言いつくろった
- ※4 安堵あんど〓気がかりなことがなくなり、安心すること
- ※5 ニュアンス〓言葉などの微妙な意味合い、言外に表された話し手の意図
- ※6 葛藤〓心のなかで相反する思いが対立しあい、どちらを選ぶかで迷うこと

問一 — 部①「皆の（拍手）に思いっきりの笑顔で応えている」とあるが、「拍手」にへ がついている

のはなぜか、次から選び、記号で答えなさい。

ア 皆が拍手をしているが、ろう者の瞳美には「その音が聴こえない」から。

イ 皆の拍手は、ろう者の瞳美のための「手話による拍手」であるから。

ウ 皆の拍手は、瞳美には聴こえないので「拍手の真似」をしているだけであるから。

エ 皆が拍手しても、瞳美にとって「ただ手を動かしているだけ」に過ぎないから。

問二 — 部②「荒井尚人は、その光景をどこか不思議な気分で眺めていた」とあるが、何に對してそのような

気分になったのか、次から選び、記号で答えなさい。

ア 年末の忙しい時期の誕生会に予定していた人々が一人の欠席もなく、全員出席して団らんできたこと
に對して。

イ 複雑な家庭で生まれ育った自分が、このような家族団らんの時間を過ごしていることに對して。

ウ 長年、会うこともめつたになかった兄一家と自分の家族が交流して、団らんしていることに對して。

エ 小説やドラマなど、作り話の中にしかないと思っていた家族団らんの場が目の前にあることに對して。

問三 — 部③「生きていれば園子以上に孫のことを溺愛でまあいしたに違いない」とあるが、荒井がそう思う理由は何

か、次から選び、記号で答えなさい。

ア 結婚はしないだろうと思っていた自分が結婚し、血のつながった孫をつくったことを道代が喜ぶだろうということ。

イ 道代は特別に自分を可愛がってくれたので、その子どもである瞳美はやはり特に愛してくれただろうということ。

ウ 「ろう者」である瞳美に対しては、「ろう者」同士としての親近感を道代がいつそう強く持っただろうということ。

エ 家族のなかで一人だけ「ろう者」として生まれた瞳美に対して、道代は特別な思いを抱くだろうということ。

問四

A

B

には、同じ語が入る。次から選び、記号で答えなさい。

ア キヨロキヨロ イ キヨトキヨト ウ キヨロリ エ キヨトン

問五

——部④「司は、一斉に向けられた皆からの視線——特に美和は鬼のような顔で睨んでいた——に気づき、しまった！という顔になった」とあるが、司はなぜ「しまった」と思ったのか、次から選び、記号で答えなさい。

ア 瞳美への誕生プレゼントをクリスマスのプレゼントに重ねてしまったから。

イ 瞳美がまだよく分かっていないサンタクロースの話をしてしまったから。

ウ サンタクロースの存在を信じている瞳美にサンタの正体が家族であることをほのめかしたから。

エ 誕生日のあとに、さらにクリスマスのプレゼントももらえると瞳美に期待させてしまったから。

問六

——部⑤「荒井は、浮びそうになった苦笑を慌てて噛み殺した」とあるが、荒井が「苦笑」しそうになったのはなぜか、次から選び、記号で答えなさい。

ア 鬼のような美和の表情と、困惑している司の表情の対照が面白かったから。

イ 自分自身もかつて司とおなじような間違いをおかしたことを思い出したから。

ウ ろくなプレゼントも貰えなかった自分のさびしいクリスマスを思い出してしまったから。

エ サンタクロースが本当にいいのかどうかというどうでもいいことで皆が大騒ぎしているから。

問七 — 部⑥「物心がついた」、⑦「屈託のない」、⑩「肩をすくめる」の意味をそれぞれの選択肢から選

記号で答えなさい。

⑥「物心がついた」

ア 幼児期を過ぎて、世の中のことがなんとなくわかり始めた

イ 幼児期を過ぎて、記憶が鮮明になってきた

ウ 幼児期を過ぎて、物事の判断ができるようになった

エ 幼児期を過ぎて、記録を残せるようになった

⑦「屈託のない」

ア 感情に乱れたところがない

イ 心にかかかきなりなことがない

ウ いつもと特に変わりのない

エ 気持ちに緩んだところがない

⑩「肩をすくめる」

ア その場でごまかすふりをする

イ あきらめた様子になる

ウ きまりが悪そうにする

エ 悲しそうな様子になる

問八 — 部⑧「園子が小さくため息をつく」とあるが、この時の園子の思いはどのようなものか、次から選び、記号で答えなさい。

ア みゆきの気持ちは理解しながらも、孫と話ができない自分の境遇を残念がる思い。

イ みゆきの言うことは正しいと思いつつも、なんとか瞳美と直接「会話」をしたいという思い。

ウ こんな年齢になってまで、手話を学んで話をしろというみゆきに対してのやりきれない思い。

エ 自分に対して苦笑しながら厳しいことを言ってくるみゆきへの不愉快な思い。

問九 — 部⑨「みゆきがたしなめるような声を出した」とあるが、この時のみゆきの思いはどのようなものか、次から選び、記号で答えなさい。

ア 「ろう者」である悟志一家に対しても、失礼な発言をした母を非難する思い。

イ 「ろう者」である瞳美に対して、むちゃな要望をしている母に注意を促す思い。

ウ 手話を言葉としてとらえていない母に対して、しっかりと学んでほしいという思い。

エ 手話を拒否して、自分から歩み寄ろうとしない母を厳しく批判する思い。

問十 — 部⑩「いつまでたっても理解してくれないんだから」とあるが、みゆきは園子のどんなところを非難しているのか、次から選び、記号で答えなさい。

ア 音声日本語でやりとりができなければ、言葉が分からないと思ってしまうところ。

イ 互いに日本手話ができれば、ろう者も十分に人と意思疎通ができることを知らないところ。

ウ 日本手話は、音声日本語とまったく同じ文法に従って「会話」ができることを理解していないところ。

エ ろう者にとって日本手話が唯一の言葉であることを分かっているところ。

問十一 — 部⑫ 「気まずい空気を察したのか、横から美和が軽い調子で言った」とあるが、ここでの「気まずい空気」とはどういうことか、次から選び、記号で答えなさい。

ア 手話に取り組もうとしない園子の不満をみゆきが受けとめず、荒井もそのことに対して無関心を装っていたということ。

イ 園子の言葉をきっかけに、改めて瞳美が「ろう者」であり、将来に不安が残るということとを皆が深刻に受け止めたということ。

ウ 手話について消極的な姿勢である園子に対する不満を、みゆき・荒井がそれぞれの視点から持ち始めてしまったということ。

エ みゆきと園子のやりとりを聞き、荒井も改めて瞳美の言葉について考え、三人がそれぞれ複雑な思いをもっていたということ。

問十二

C

に入る適当な語句を次から選び、記号で答えなさい。

ア 目を見つめて イ 声を出さずに ウ 表情を変えずに エ 時間をかけて

問十三 — 部⑬ 「園子も戸惑いながらではあるが」とあるが、この時の園子は何に戸惑っていたのか、次から選び、記号で答えなさい。

ア 本当に自分も瞳美と「おしゃべり」ができるようになるのかということ。

イ いつかは自分も手話を完全に身につけることができるのかということ。

ウ 手話のできない自分と遊んで瞳美が楽しいのだろうかということ。

エ 瞳美に言葉を覚えさせなくてもいいのだろうかということ。

二 次の短歌と俳句を読んで後の問いに答えなさい。

A たはむれに母を背負ひて

石川啄木

そのあまり軽きに泣きて

三步あゆまず

B 「寒いね」とはなしかければ「寒いね」と（ ）のいるあたたかさ

俵万智

C 滝落ちて群青世界とどろけり

水原秋桜子

D 分け入っても分け入っても青い山

種田山頭火

E 秋の雲冷たき昼のミルク飲む

山口誓子

問一 Aの短歌の歌意としてもっともふさわしいものを後から選び記号で答えなさい。

ア 病気の母を背負って坂道を下ったがその足取りの軽さに、わが子がよく成長をしたと母が喜びの涙をながした。こんな形で親孝行できるとは。

イ ふざけ半分に母を背負ってみたが、あまりに軽い私の行動に母が涙を流し、三步も歩けなくなった。なんとという恥ずかしいことか。

ウ 仲のよい親子だったので、小さいころ互いに背負いあい歩いたが、私の体重の軽さに驚き母は涙を流した。なんと親不孝だったことか。

工 遊びの気持ちでふと母を背負ってみたが、あまりに軽いのに驚いて、思わず涙が出て、歩くことができなかつた。なんと母も年老いたことか。

問二 Bの短歌の（ ）に入るのにもっともふさわしいものを、後から選り記号で答えなさい。

ア 自問するべく イ 答える人 ウ 言わないインコ エ ささやくスマホ

問三 Cの俳句の季語と季節を答えなさい。

問四 Cの――部「けり」はこの句でどのような役割をしているか。次から一つ選り記号で答えなさい。

ア 問いかける役割 イ 否定する役割 ウ 感動を表す役割 エ 繰り返す役割

問五 Dの俳句の句意として最もふさわしいものを後からひとつ選り記号で答えなさい。

ア ひたすら苦勞して前へ進んでも進んでも、山に青く流れる川は流れていない。わたしの努力も実らないのか。

イ ひたすらに分け入っても真つ青な空の下に山は見えない。わたしの夢と同じようにどこに青い山はあるのか。

ウ 踏み分け入って、進んでも進んでも青い山は続く、いったいどこまで続くのか。わたしの惑いと同じように。

エ どんどんと山の中を分け入って進んでいくと、青い山が見えてきた。あれが今のわたしの目標なのだ。

問六

Eの俳句の意味を書いた用紙が次のようにバラバラに切れてしまいました。どんな順序に読めば全体としてまとまった一つづきの文章となりますか。正しく並び替えたものの記号を後から一つ選び答えなさい。

- ① しみじみと秋を感じさせる。その秋の、
- ② のどもとを通って行く牛乳の冷たい感触は、
- ③ 昼のくつろぎの一時に、ゆっくりと牛乳を飲む。
- ④ 深く澄すんだ空には淡あわい雲が浮かんでいる。

ア

- ③
- ②
- ①
- ④

イ

- ②
- ①
- ④
- ③

ウ

- ①
- ③
- ②
- ④

エ

- ③
- ①
- ②
- ④

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文章を作る上で、人に印象的に物事を伝える方法として、慣用句とかことわざを入れる技術があります。例えば、ことわざは、私たちが日常の話の中にはさんで、

1

【 ように使われます。

ことわざとして出てくる言葉は、現在ではなじみのないものもありますが、多くはふだんの生活で使用している意味がよくわかるもので、たやすく楽しんで覚えることができます。

その種類として「短気は損気」のように（A）を重ねたものがあると思えば、「聞くは一時の恥、聞かぬは（B）の恥」のような対句形式のものもあり、また音数の重ね方で調子を整えたものも少なくありません。「早起きは三文の得」（五七調）、^①「飛んで火に入る夏の虫」（七五調）、^②「帯に短したすきに長し」（七七調）などのように様々な形のもが残っています。

先に記した「三文」という単語も、現在ではあまり使われませんが、自分で調べたり、父母・祖父母・先生などに意味を尋ね知ることから言葉とその時代を生きた人の歴史を知るきっかけにもなります。やたらとことわざを使用することはかえって文章や会話をわかりにくくもしますが、こういった言葉の知的な遊び方も活用しながら人と話をしたり、文章を作ってみると、人とコミュニケーションをとることや文章を作ることの楽しさを学べるかもしれません。

問一 【1】に入るのにふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉自体に全く意味がなく、なぞなぞ形式で伝える
- イ 有名人の言葉や書物の中の文句が言いあらわされる
- ウ 西洋の言葉のみが使われ、正確に正しく人に教えを説く
- エ おもしろく、しかもずばりと物事の急所を言い当てる

問二 (A) に入るのにふさわしいものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じ音 イ しぐさ ウ 比喩 エ 状態

問三 (B) に入る言葉を漢字二字で答え、ことわざを完成させなさい。

問四 — 部①・②のことわざの意味を次からそれぞれ選び記号で答えなさい。

① 飛んで火に入る夏の虫

ア 真夏に火の粉が飛んできてさらに暑くなるくらい物事にたえられないこと。

イ 難しいと思われることも自分から積極的に挑戦すること。

ウ 自分から進んで、身をほろぼすような物事に関係すること。

エ 夏の夜にきれいな花火と虫の音を聞いて心がやすらぐこと。

② 帯に短したすきに長し

ア どんな場面でも様々なことに使えて便利だということ。

イ 使用する場面に応じてものを選べるということ。

ウ 長さやラインがきれいに整っていてとても美しいこと。

エ 物事が中途半端(はんぱ)で役に立たないこと。

四 次の問題に答えなさい。

問一 次の会話文の中で、敬語の使い方の正しいものをひとつ選び記号で答えなさい。

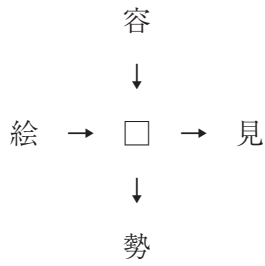
ア 「兄さん、この猫になにか食べ物をあげてください。」

イ 「先生、祖父が先生のお宅へうかがうそうです。」

ウ 「おとうさん、先生がお礼を申していました。」

エ 「先生が拝見した写真を私に見せてください。」

問二 次の□に入る正しい漢字一字を答えなさい。



問三 次の文章が正しくなるように(①)(②)に入る語を、後の記号からそれぞれひとつずつ選び、記号で答えなさい。

夏になると、私の住んでいるこの辺りの家族は、夏休みをとって、はなやかな服装で海外旅行や国内旅行へ出かける。(①)、休暇をゆつくりと家で過ごす人たちもいるが多くはない。今朝も「おはよう。」と、いつも声をかけてくれる隣の家の小学生の兄弟たちが、「両親といっしょに、海へ二泊三日の旅行へ(②)」。私は、出発するとき庭先からその家族たちに「いってらっしゃい。」と声をかけた。ようやく日本の明るい夏が始まったという感じがする。

- ① ア しかし イ また ウ つまり エ それで
② ア 出かけるべきだ イ 出かけたかった ウ 出かけたようだ エ 出かけましょう

五 次の——部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① キヨウド史を研究する。
② 実力をハツキする。
③ フツキンをきたえる。
④ ズノウで勝負をする。
⑤ 個人のソングンが認められる。

六

次の――部の漢字の読みを書きなさい。

- ① 潮流うしほが変わる。
- ② 沿道えんどうには見物人がいた。
- ③ 一方いっぽうに偏る。
- ④ 夏至げつしの日は昼が長い。
- ⑤ 危険けんけんな状態に陥る。

